

文学研究は、それぞれの作品の方法概念をさぐり、その本質（主体概念）を明らかにすることにつぎる。また、そのことのつきかざねによって作家論が構築される。文学研究にとっては、これらはもはや自明のことである。しかし、日本文学研究の現状は、かならずしもそうではない。このことが正当に認識されていないようにもみえる。かつて芭蕉は、『笈の小文』で自己の紀行文観を集約して、「其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれだれもいふべく覚待れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ」と述べたが、このことばは、私にとつては、ひとつの比喩の意味をもっている。たとえば古典研究で、個々の詞章の典拠の考証も、「そこに松有、かしこに何と云川流れたり」などの実証だけにとどまるな

ら、作品成立の背景や周辺に、ただそのことがあったという指摘に終わる。もとより考証や実証が無用であるというのではない。問題は、その語句や詞章がそこにあることが、作品主体の発想や本質にどうかかわるかの認識である。その考証が、作品主体の証明に有用であるかどうかの論証が必要な

佐渡によこたふ天河

水田潤

である。そのときにはじめて、それらの作業が、基礎学として、また、文学研究の方法論としての意味をもつことになる。

最近、ある期待をもって読んだ一つの研究論文があるが、やはりその論稿も、「そこに松有、かしこに何と云川流れたり」の提示だけにとどまっていた。論証のない

态意的な作品論は、もとより印象批評であり評論にとどまる。しかし、論証とは資料の提示だけによるものではない。志賀直哉も言うように、文学作品は、作家の手から離れた瞬間から独立している。作者の意図や発想も、作品主体そのものが証言することになる。形象論や文体論が文学研究にとって

意味をもつのは、このことによっている。作家のモチーフや構想も作品主体のなかに消化されている。『奥の細道』の「荒海や佐渡によこたふ天河」の句を、出雲崎での地理や天文学からの考証によって、「佐渡によこたふ」の非現実性を指摘することの愚を笑うことのできる研究主体のあり方を、私じしんに問いかけたいのである。